

2月4日 年間第5主日

イザ 6:1～8 コリ 15:1～11 ルカ 5:1～11

1. ルカ

v.10 「イエスはシモンに言われた“恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。”」

すべての使徒たちは、そのために招かれて、キリストの証人となった人々でありました。そしてその務めは、使徒たちの後継者である代々の時代の司教と、これに従属する司祭たちに受け継がれて、今日に至りました。それだけではなくて、信徒も“おのおの分に應じて働き、キリストの体を造り上げていく”(エフェ 4:12-16)という仕方で、この努めに与っています(信徒使徒職に関する教令 2)。

その使徒たちの頭であるシモン・ペトロがイエスの弟子となったときの、ルカ福音書が伝える物語りに耳を傾けましょう。この物語りの中で v.5 の“先生”が、v.8 で“主よ”に変化しています。v.10 の“恐れることはない”という言葉で明らかのように、ペトロはここで“神顕現”を体験したのです。そして言いました。「主よ、私から離れてください。私は罪深い者なのです。」

神が聖であるという表現に、現代人は常に道徳的な意味を読み込んでいると、R・オットーは彼の著書“聖なるもの”の中で指摘しています。カトリック神学においても、通常“罪”とは道徳的な意味で理解されて来ましたが、“告解(ゆるし)の秘跡”についてのカテキズムの解説を読めば、それは明らかです。しかし聖書には、単なる罪悪意識や自然的恐怖とは別な恐れ(畏れ、怖れ)が描かれてるのです。それは聖なる神に対する、神の怒りに対する畏怖であって、本来道徳的な性質とは無関係なものです。その一例として、ハバ 2:20 の「主はその聖なる神殿におられる。全地よ、御前に沈黙せよ」をあげることが出来ます。

シモン・ペトロが体験したのは、まさにこの恐れでありました。彼の叫びには、我が国のテレビにしばしば登場する“管理責任の不備を認めて謝罪会見する責任者”の姿とは、いささかの類似点もありませんでした。この物語りは、イエス・キリストの福音が、“差し迫った神の怒り”(3:7)からの、“生まれながら神の怒りを受けるべき者”(エフェ 2:3)の救いの福音であることを、証言しているのです。

2. イザ

v.3 「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」

イザヤはこの神顕現に対して、ただ恐れる以外ありませんでした。

v.5 「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は、王なる万軍の主を仰ぎ見た。」

そして彼は、「あなたの咎は取り去られ、罪は赦された」という言葉で、預言者としての召命へと導かれました。

人間の単なる罪悪意識や自然的恐怖からは、宗教は生まれて来ません。現代世界の危機をいくら叫ん

でも、それで人間が、あるいは教会が、現代的な救いや福音を創り出すことは出来ないのです。神が、神だけが、“キリストによって実現される秘められた計画”(エフェ3:3-6)を啓示してくださることを、使徒たちは語りました。救いは、神の側からだけ来るのです。

私たちがミサで、感謝の賛歌を歌うとき、パンと杯のうちに臨在される祭壇のキリストへの恐れ of 感情を持つのは、このためです。私たちはそこで、キリストの十字架の福音に直面しているのです。

3. I コリ

w.3-4 「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたもの(使徒的伝承)です。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、……」

この“最も大切な”福音を、現代の教会は再発見しなければなりません。それは使徒たちが伝えたもので、その使徒的伝承を今も支えておられるのは、天上のキリスト御自身だからです(マタ28:20)。

過去半世紀間の神学校も、一般大学と同じように、間違った平等主義、アンチ・エリート主義の風潮や反体制主義的な気風に強く影響されて、教会が受け継いで来た使徒的・伝統的使信を過剰に軽視して来ました。そのため、カトリックの司祭も、プロテスタントの牧師も、本格的な聖書の学びからはなはだしく遠ざかってしまったというのが実状です。聖書は、“そこから神のことばを聞く”ものではなくて、そこから“自分たちの主張に都合の良い材料を得る”資料集と考えられて来ました。聖書の本来のメッセージ、使徒たちの宣教した福音などについて何の基礎知識もない司祭や牧師が、現代的感覚とか貧しい人々の側に立つなどと称して喋りまくり、ジャーナリズムやインターネット上での実りのない議論を繰り広げて来たのです。

今朝の朗読配分を通して私たちに、「最も大切なこと」と語りかけてくださっているのは、天上のキリストであり、この方がまた祭壇でパンと杯のうちに臨在されることを、私たちは恐れをもって感謝しようではありませんか。罪の赦しは、人間の行いによってではなく、ただキリストの恵みにより、信仰によって教会に与えられているのですから。 ハレルヤ、アーメン。

2月11日 年間第6主日

エレ 17:5～8 Iコリ 15:12～20 ルカ 6:17～26

1. ルカ

v.17 「イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らな所にお立ちになった。大勢の弟子とおびただしい民衆が、ユダヤ全土とエルサレムから、また、ティルスやシドンの海岸地方から(来ていた)。」

ルカ福音書は、12使徒が山の上でイエスに選ばれたのに直ちに続いて、このように語りました。それは、使徒たちが主の復活の後に全世界に福音を宣教するようになるという、神の計画のいわば象徴として、この頃のことを描こうと考えたからです。初代教会における使徒たちの宣教を、かつてのイエスの宣教とは別なものと考えて、“使徒に聞く”のではなくて“(ナザレの)イエスに聞く”ことが、現代における福音の再発見になると考えるなら、それは歴史の教会とは別な道を歩むことになります。

使徒たちの宣教によってキリストの福音を受け入れた人々は、神の国の相続人とされた“貧しい人々”、すなわち敬虔で信仰深い人々でありました。キリストの贖いによって救いに入れられた人々は、かつて飢えた(希望のない)者でありました。しかし今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって(エフェ2:13)「幸いである」(vv.20,21)と呼ばれるようになりました。

しかし、使徒たちの宣教に耳を傾けず、キリストの福音を受け入れない人々は「不幸である」(vv.24,25,26)のです。

2. Iコリ

キリスト教は、使徒たちの宣教から始まった、使徒たちの宣教したキリストの福音に起源する宗教であるということに、無知な人々がたくさんいます。

キリスト教は、“神のことばの宗教”ですから、もし人が健全な信者になりたいと望むなら、神のことばを聞かなければなりません。ところが、多くの人々が“神のことば”とは何かを正しく理解していないのです。神のことばとは、使徒たちが宣教したキリストの福音、十字架と復活の福音のことであって、聖書はこれを「キリストの言葉」(ロマ10:17)、「十字架の言葉」(Iコリ1:18)と呼びました。「神は、この終わりの時代に、御子によってわたしたちに語られました」(ヘブ1:2)とは、その十字架の贖いの出来事のことなのです。

神のことばは、瞑想する人の心に浮かぶ神秘的な声、祈っているとどこからか聞こえて来るお告げ、困難や苦しみの中で人が発見する主観的な叫び……などではなくて、「御子に関する福音」(ロマ1:2-4)であると、使徒たちは宣教しました。その使徒たちの宣教を伝えるものが、“聖伝と聖書”です。

使徒たちが「キリストは死者の中から復活した」と、福音を宣教しているのに、罪と死を打ち砕かれた勝利の福音ではなくて、人間が考え出した別の福音(ガラ1:7)を語るなら、「あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もお罪の中にあることとなります。」(v.17) 「しかし、実際、キリストは死者の中から復活

し、眠りについた人たちの初穂となりました。」(v.20) これがキリストの福音、十字架と復活の福音です。

3. エレ

v.5 「主はこう言われる。呪われよ、人間に信頼し、肉なる者を頼みとし、その心が主を離れ去っている人は。」

福音は、それを聞いて受け入れる人には祝福ですが、これを受け入れることも信じることもしない人には“呪い”となることを、聖書は繰り返し語っています。聖伝と聖書によって、教会が受け継いで来た福音は、祝福と呪いの両面の結果を伴うものであることを、アタナシオス信条は次のように明言しています。

1. すべて救われたいと願う者は、何よりもカトリックの信仰を保つことが必要である。
2. その信仰を、何人も、完全にしかも汚されることなく守るのでなければ、疑いもなく永遠に滅びるであらう。

私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝しましょう。

v.7 「祝福されよ、主に信頼する人は。主がその人のよりどころとなられる。」

ハレルヤ、アーメン。

2月18日 年間第7主日

サム上 26:2～23 | コリ 15:45～49 ルカ 6:27～38

1. ルカ

v.27 「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言うておく。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にきなさい。」

聖書から拾い出された多くの名言の中で、こんなに勝手に一人歩きして来たものはない程、この聖句は多くの人々によって安易に語られています。それではこの“敵”とは、いったいだれのことなのでしょう。

今日の日本人の心に浮かぶ“敵”とは、北朝鮮のことでしょうか？ それとも国際テロ組織アルカイダ？ レバノンのヒズボラ？ パレスチナのハマス？ イラクを内戦状態にしているスンニ派やシーア派の民兵組織？ そのほかにも次々と候補を挙げる事が出来ます。しかし冷静に聖書に耳を傾けてみると、もしかしたら天上のイエスが、“わたしはそんなつもりで言ったのではないのに……”と口ごもっておられる様子が、あなたの脳裏をかすめるかも知れません。

ルカ福音書は、イエスのこれらの説教が先ず第一に使徒たちに向けられた教えであったという理解で、語りました。6:12-16の使徒の選びに続いて、6:17-19ではやがてその使徒たちがペンテコステの日に民衆に向かって宣教するようになる場面を暗示した後、6:20以下の説教が置かれています。実際使徒たちは、教会を愛して、これを造り上げるために労した人々でありました。「だれかが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまずくなら、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか」(II コリ 11:29)。「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです」(I コリ 9:23)。

この使徒たちを囲む民衆にも、この説教は向けられています。しかしそれは、使徒たちから切り離された一般人を意味しているわけではありません。カトリック教会が教える“信徒の使徒職”を念頭にして、ルカ福音書は読まれるべきでしょう。“使徒職”は、使徒たちの後継者である聖職位階にある人々の専有物ではなくて、すべての信者は「洗礼と堅信を通して主自身からこの使徒職に任命される」(教会憲章 33)のです。ですから、そこで追い求められている愛は、「教会を造り上げる」ための愛なのです(I コリ 14:1,3,5,12, 17,26 参照)。

2. サム上

ダビデがサウル王に対して寛大に行動し、彼を殺そうとして執拗に追って来る王(王上 18:6-11, 19:1 参照)に手をかけることをしなかった、その理由はただ一つ、「主が油を注がれた方」(v.23)でありました。彼は博愛主義者でも、人道主義者でもなくて、イスラエルの神主を愛する“信仰の人”でありました。もし人が聖書から神のことは(キリストの福音)を聞きたいと願うなら、「信仰がなければ、神に喜ばれることは出

来ません」(ヘブ 11:6)という不可欠な前提を理解する必要があります。

聖書の中から拾い出された“名言”が、どんなに勝手に一人歩きしていても、それはもはや“神のことは”ではないのです。

3.1 コリ

v.49 「わたしたちは、土から出来たその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。」

それは私たちが、キリストの死に与る洗礼によって罪に対して死に、復活されたキリストに結ばれて新しい命に生きる者となったからです(ロマ 6:3-11 参照)。

しかし地上の教会は、「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着る」(15:54)終末の日を待望しつつ歩んでいるのであり、今はまだ“自分の懐に罪人を抱いている教会”(教会憲章 8)なのだということを、決して忘れてはなりません。教会から“この希望”を取り去るなら、「あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります」(15:17)。

今朝も司祭がミサの中で、会衆の唱える主の祈りに続いてその副文の中で、「わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを、待ち望んでいます」と祈ると、会衆は声をそろえて応唱します。「国と栄光は、限りなくあなたのもの。」そしてそれに続いて司祭が、教会に平和を願う祈りを唱えます。「わたしたちの罪ではなく教会の(使徒継承によって受け継いで来た)信仰を顧み、おことばの通り教会に平和と一致をお与えください。」

私たちの主イエス・キリストによって“わたしたち教会”に勝利を賜る神に、感謝しましょう。

ハレルヤ、アーメン。

2月25日 四旬節第1主日

申 26:4～10 ロマ 10:8～13 ルカ 4:1～13

1. ルカ

v.1 「さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。」

イエスがヨハネから洗礼を受けて、天からの声が聞こえたのに直ちに続いて、ルカ福音書は聖霊に満ちてお帰りになったイエスを描いています。この「聖霊に満ちて」(vv.1,14)という言葉でルカが表現しようとしたのは、恐らく御子の従順(フィリ2:8)でありました。

イスラエルの初代の王サウルに油を注いだサムエルは、「主の霊があなたに激しく降ったら、……しようと思うことは何でもしなさい。神があなたと共におられるのです」と言いました(サム上 10:6-7)。ダビデに油を注いだ場面でも、「その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった」と書かれています(同 16:13)。イスラエルのためにペリシテ人と戦ったサムソンの物語りにも、繰り返し「主の霊が激しく彼に降ったので」と書かれています(士 14:6,19, 15:14)。

しかし、それは人が神から独立して行動出来るという自由を意味していないことを、理解しなければなりません。「だれが主の相談相手であつたらうか。……すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」(ロマ 11:35-36)と書かれている通りです。

イエスは聖書を引用して、悪魔の誘惑にお答えになりました。それは父なる神への従順を意味していました。悪魔も聖書を引用して、イエスを誘惑しました。それは神への反逆のための悪魔の論理に、聖書を利用したに過ぎませんでした。

2. ロマ

v.8 「“御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。” これは、わたしたち(使徒)が宣べ伝えている信仰の言葉なのです。」

キリスト教は“神のことばへの信仰”の宗教です。しかし残念なことに、多くの人々が“神のことば”とは何かを正しく理解していません。神のことばとは、使徒たちが宣教したキリストの福音、十字架と復活の福音のことであって、私たちキリスト者は「恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です」(エフェ 2:8)。

信仰とは、人間の善行や功績によってこの世を理想の神の国に作り替えることでも、また回心や償いによってイエスの贖罪の死が不必要な程に人間が善良になれると思いがかることでもありません。そうではなくて、「神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを」(エフェ 1:6)、「心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われる」(v.10)ことなのです。

この、使徒たちが宣教したキリストの福音、十字架と復活の福音を聞くために聖書に親しむことは、すべ

てのキリスト者にとっての「生活のよりどころ」なのであり、もし福音に無知なままで人生を終わるなら、「あなたがたが信じたこと自体が、無駄になってしまうでしょう」と、使徒パウロは言いました(1コリ15:1-2)。人間が考え出す理想の国や社会を目指すための論理に、聖書を利用しようとする考え方は、まさにイエスを誘惑しようとした悪魔のやり方であることを知らなければなりません。

使徒たちが宣教し、代々の教会が受け継いで来た“十字架と復活の福音”の外には、別の福音は存在しないのです。聖書を学ぶことは、その素材を再調理して新しい現代風な福音という料理を創作することでは、決してありません。イエスと悪魔がどこで違っていたのかを理解することは、とても大切です。

3. 申

v.10 「わたしは、主が与えられた地の実りの初物を、今、ここに持って参りました。」

ミサが主の死と復活の記念であることは、カトリック教会の「絶え間ない確固たる伝承」であります(ミサ典礼書の総則 前文 1)、感謝の典礼の中で供えものが準備されるときに信者がささげる献金も、「その血によって贖われ、罪を赦された」(エフェ1:7)信者の奉納品であって、御子の死と復活に一つに結ばれてその記念となります。

イスラエルが、神がその先祖をエジプトから導き出されたという救済史の出来事を、彼らの祭儀で繰り返し記念することによって現在化したように、カトリック教会のミサは主の十字架のいけにえの“秘跡的再現”(総則 前文 2)なのです。ですから、私たち信者がキリストの福音に心を向けて、「神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを」(エフェ1:6)、「心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われる」(ロマ10:10)ことを学ぶなら、今年の四旬節のミサは実り豊かなものになるに違いありません。それこそが、御子の従順に倣う私たちの「信仰による従順」(ロマ1:5)であります。

この“聖書の学び”が、“主の羊たちが御言葉によって命を受けるため”(ヨハ10:10)のささやかな奉仕となりますように。 アーメン。